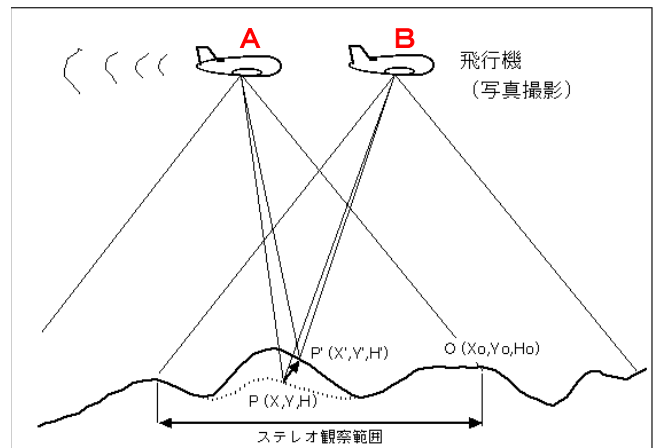
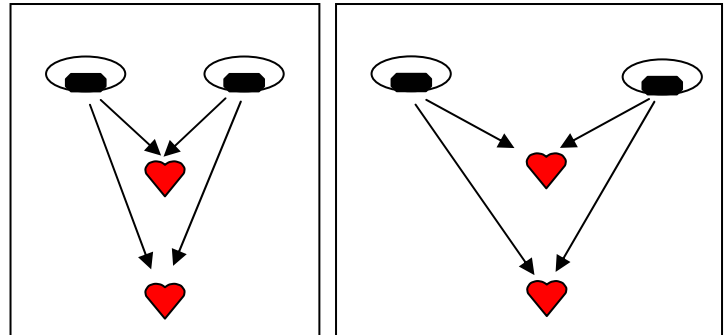


◆ 空中写真はなぜ立体的に見える？

- 人間は左右の目で対象物を見る→見る角度が左右の目で少しずつ違う→見た画像を脳内で処理→立体的に見える。
- 近く見える→視差角が大きい
遠く見える→視差角が小さい
- もし目が離れていたら？
→同じ距離の物に対しても視差角が大きくなるので、より立体的に見える
- 飛行機で飛びながら断続的に撮影する→これを同時に見る (Aを左目、Bを右目) →ものすごく離れた目で見た状態に相当する→すごく立体的に見える



◆ 肉眼実体視の方法

- ① メガネは外したほうが見やすい
- ② 2枚の空中写真を半分くらい左右重ねにして置く。曲がらないようにまっすぐ重ねる。
- ③ 何か目立つ目標物を探す。白い建物や海上の船など。
- ④ 左右の写真に写った目標物を、自分の瞳孔間隔の60~80%程度離れた状態になるよう、写真の重なり具合を調整する。
- ⑤ 右目で右の写真の目標物を、左目で左の写真の目標物を見る。
いきなりこのようなことはできないので、写真全体を遠くを見るようにしてボーッと見る。目標物が左右にボーッと見えるので、これを1つに重ねるようにする。
これがむずかしい場合は、左右の人差し指を立てて、右手の指を右目のまん前、左手の指を左目のまん前に立てる。最初は2本の指が見えているが、ボーッと遠くを見る目をすると、これが動き出して1本に重なる。これが上記のトレーニング法。
- ⑥ 重なったら、そのままじーっと見る。ピントが合うと目標物が左右に離れてしまい、1つに重ねようとするとうピントがボケるが、何度も繰り返していると、あるとき突然1つに重なって、なおかつピントも合った状態になる。これで実体視成功。
- ⑦ 実体視できたら、少しずつ目標物の周囲を見渡す訓練をし、視野を広げるトレーニングをする。

◆ フォト・リニアメントとは？

- 実体視したときに見える直線状地形で、尾根や谷の折れ曲がり、直線的な谷や山裾、ケルンコルやケルンバットをつないで浮かび上がってくるもの。
- 写真を見慣れるほど多く、また長く抽出できるようになる。
- 柔らかい赤鉛筆などでリニアメントをなぞって写真に薄く線を引き、あとで地形図に写し取る。
- 水系変位 (谷のクランク状屈曲) が認識できたら、変位方向を矢印で示す。
- 明瞭なリニアメントは実線で、不明瞭なものは破線で示す。